

第1版の序

理学療法士・作業療法士の基礎の3本柱は解剖学・生理学・運動学である。現職者であれば、誰もがこの言葉を耳にしたことがあるだろう。当然ながら、解剖学の学習は学生の初年次のみで終わるものではなく、医療人として生涯を通じて継続しなければならない。しかし、近年の学生達を見ていると解剖学書ではなく、国家試験対策テキストで解剖学を学ぶ姿が多く目にする。この現状に対し、教育者として大きな違和感を抱いていた。約3年前、羊土社様より本書の依頼をいただいた際に上記に対応する書籍を作り上げたいと強く思ったことを、今も鮮明に覚えている。

本書は順天堂大学 解剖学・生体構造科学講座の坂井建雄教授の監修のもと、理学療法士として初めて単著で書き上げた解剖学書である。以下に本書の特徴を挙げる。

第1に用語の正確性である。現職者が日々の臨床現場で用いるリスター結節、第2肩関節、ジエルディ結節（ガーディ結節ではない）などは、解剖学用語としては扱われていない。そのため、一般的な解剖学書には記載されないのが通例である。しかし、それらは解剖学用語ではない反面、臨床用語としては非常に重要な意義をもっている。そこで本書では解剖学用語に準じたうえで、臨床用語についても記載を行っている。

第2は図譜へのこだわりである。本書の執筆に際し、数百点の図譜の描き下ろしを依頼した。また併せて、臨床現場や国家試験などを想定し、非常に多くの修正を実施している（細やかな依頼に応えてくれたイラストレーターの吉田 壮氏には、心から敬服する）。どういった点にこだわりがあるかは是非、ご自身の目で確かめていただきたい。

第3は理学療法士・作業療法士の教育を想定した構成である。我々の解剖学の教育において運動器の占める割合が多いことは、国家試験の出題率を見ても明白である。また、運動器の知識は運動学や整形外科、評価学などの履修に先立って身につけておかなければならない。そのうえで本書は、一般的な解剖学書よりも運動器に比重を置いた構成に仕上げている。また各章に多くのコラムを加えることにより、国家試験・臨床実習・卒後教育に直結する知識を身につけることができる内容となっている。

本書を書き進めるうえで、分不相応な依頼ではないかと苦悩する時期もあった。しかし、本当に多くの方々の支えのおかげで今日という日を迎えることができた。本書の監修を快く引き受けさせていただき、いつも不肖の教え子に多くの学びを与えてくださる坂井建雄教授には心から深謝したい。そして同研究室で共に学ぶ吉田俊太郎先生、木ノ瀬翔太先生をはじめ、助言をくれた多くの同志達には感謝の念に堪えない。そして今回の企画を立ち上げてくれた羊土社様、とりわけ多くのサポートをしてくれた望月恭彰様、溝井レナ様に心から謝意を表したい。

最後に、いつも心身ともに支えてくれた妻・芳恵、遊びたい気持ちを抑えて我慢してくれた3人の子供たち、そして職業人として学び続ける姿勢を背中で教えてくれた母・敏子に心から感謝する。

2018年10月

町田志樹